

# play here outline 2026

## はじめに

まず、できるだけシンプルに本資料の趣旨等をご紹介します。

インクルーシブ遊具を置いてお終いにしない、インクルーシブ公園づくり。小金井みんなの公園プロジェクト「play here」とはそのためのプロジェクトです、とすることができます。とするならば、何をすべきか？それを問い応え続けることを、活動の中心に置いてきました。令和6年度の調査・検討等を経て、令和7年度にはハード整備が完了しました。ですから、令和8年度においては、「インクルーシブ遊具を置いてお終いにしない」としてきたことが、より一層、問われるものになります。本資料は、それを問い応え続けていくための、具体的な活動指針をまとめたものになります。

## 経緯と背景

次に、本文に入っていく前に、長くなりますが、play hereの令和6年度からの活動推移をご紹介します。

そもそも、公園は「みんな」のためのものです。しかしながら、その「みんな」という枠組みに入ることに困難を伴う方々がいます。例えば、車椅子を利用していたり、対人コミュニケーションに困難さを覚える子どもたちであり、その保護者の方々です。

play hereは、それらの課題に関する実態を把握し、問題の所在を見極め、当事者の方々・市民・関係団体等との協同により、それらの解決を「インクルーシブ公園」をつくることを通して目指すものです。ひいては、小金井市における共生社会の実現に寄与することをも目的としています（[play here](#)では「問題の根」を探ろうとし続けています）。

令和6年度の事業における様々な調査・検証等は、[「3つの公園における整備計画」](#)や「[小金井市インクルーシブデザインに配慮した公園活用ガイドライン](#)」に結実しています。それらは、これからの具体的な環境整備や部局を横断した連携のために活用されています。また、それらの考案やプランニングの基礎となった[関係者の方々へのインタビュー](#)も含めて、プロセスや各種資料をオープンなものにすることで、できるだけ公益性の高い本事業の透明性を高めることも企図してきました（[公式サイト](#)では、様々な資料が公開されています）。

令和7年度においては、整備計画が実際に実行され、インクルーシブ化に向けたハード整備が進められました。が、それで終わりではありませんし、終わりにしてはいけません。play hereでは、「公園は、ありがたい未来の練習場」というフレーズを繰り返すようになりました。なぜなら、その「練習」の先にしか、「みんな」や「公」というものは無いように思うからです（まさにそのことを表現した[コンセプトブック](#)も作成が叶いました）。

本資料は、「みんな」で「練習」をしていきませんか？という呼びかけのためのものでもあります。

#### 大切にすべき考え方（令和6年度より継承発展）

##### ・ハード整備偏重を避けたい

遊び場等の整備において、ハード整備偏重は避けるべきです。ハードとソフト、そして持続的な運用体制が健やかに統合される状態を目指します。

##### ・ソフト運用を踏まえた持続可能な体制構築を前提としたい

市内の公園では、市民によるマルシェイベントや移動販売等の利活用が促進されつつあり、指定管理者制度の面的な導入も始まっています。またそれらにおいて、小金井市の特色の一つでもある農業従事者の方々との連携も進められていますし、公園ボランティア制度や「プレーパーク」の実践の歴史も積み重ねられています。そのような市内の多様な主体との連携を引き続き推進することが望ましいと考えます。

##### ・心のインクルーシブに配慮した普及啓発に留意したい

「障害の社会モデル」といった考え方を踏まえ、豊かに育まれるべきものは、私たちのリテラシーやマインドセットであると考え、普及啓発活動に注力します。

##### ・地域の気運や住民の主体的な関わりを醸成したい

当事者の方々・市民・関係団体等との協同を基礎とし、また子どもたちとの対話の機会を大切にしていきます。

##### ・中長期的な目線で解決したい

小金井市が管理する公園の数は200を超えます。インクルーシブ遊具の導入といったハード整備の面から見ると、それら全ての公園に対して一律的な整備を行うことは現実的ではありません。とはいえ、老朽化した遊具やトイレ等の再整備の際に、インクルーシブデザインの観点で配慮されたものに置き換えるといった検討は積極的にしていくべきと考えます。

##### ・知見を深めたい

障害と言われるものには、目に見えやすいものから見えづらいものもあります。さらには、障害があるとされる人たち、そして障害がないとされる人たちも、同じように個性を持ちます。それぞれの「公園で遊びたい」という気持ちが阻害されないための工夫や制度。それらをしっかりと捉えていく必要があると考えます。

### 持ち寄り合いという、ピクニック的な「自治」へ

ピクニック的に経験や知見を持ち寄り合って成り立たせていく。これは、言い換えると「みんなでどうにかしていく」ということで、「自治的」とも言えます。文化人類学者であり、埼玉の見沼で福祉農園を運営する猪瀬浩平さんは、「自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕は〈自治〉と呼びたい」と言い、「自分やほかの生命を大切にしたいと思う〈やさしさ〉から生まれる」ものとして自治を捉えています。play hereでは、このような意味における「自治」を大切にしたいと考えています。

### 公共事業としての参加のデザイン

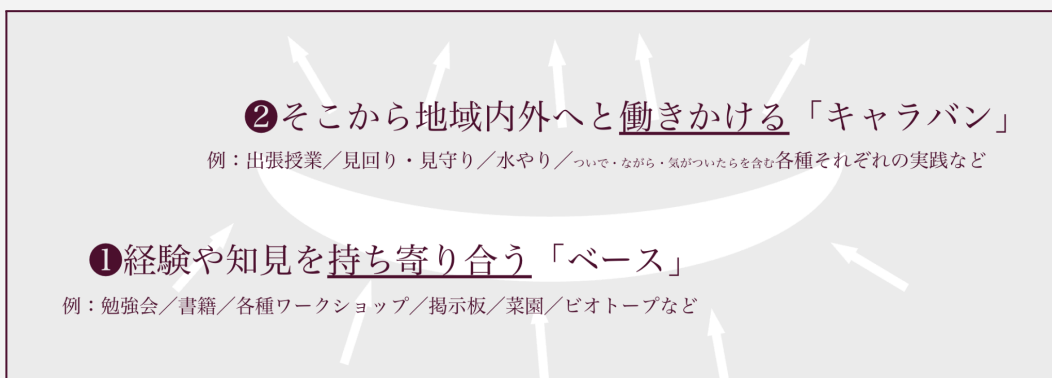
小金井市は桜が有名ですが、玉川上水沿いに並ぶ桜が江戸時代における公共事業の一環であったことはあまり多く知られていません。どういうことか。江戸の水道インフラであった玉川上水、その土手は放って置くと崩れてしまいます。なのですが、花見に多くの人が訪れるようになると、踏み固められて、土手の崩落が防がれていたというのです。水道と同じように、公園は社会のインフラですし、その公園を障害のあるなしに関わらず遊べる場にしていくことも、同じ様にインフラ事業です。「ついで」「ながら」「きがついたら」といった公共事業への参加を誘発していた、小金井の桜から学ぶことも多いように思います（可処分時間が限られる現代社会においては、強固な組織を組成するよりも、ゆるやかな実践コミュニティを育むことが求められると考えます）。

### 踏まえるべき「住宅街型インクルーシブ公園」の特徴

私たちが対象としているインクルーシブ公園は、住宅街のなかにあります。それを可能性に転じさせることが必要です。どういうことか。不特定多数の利用者が集まるものと比較すると、公園利用者は高確率で、その周辺地域の住民であり生活者であり得る。それは、インクルーシブな状況を創出するための重要なポイントであると考えからず。たとえばメッセージを伝えたい対象がある程度明解ということでもありますし、暮らしや生活の延長線上にあるということは、「ついで」「ながら」「きがついたら」といった参加のデザインがしやすくなるということです。

### 「ベース」と「キャラバン」としてのplay here

ここまでの話をまとめると、「経験や知見を持ち寄り合うことを大切に、そこから地域や社会に働きかけていく」となります。令和8年度において、play hereをそのための場として捉えた施策を展開していきます。



## 【1】3つの公園で「共に事にあたる活動」を起こしていきます

令和7年度において、栗山公園・梶野公園・三楽公園でハード整備が行われました（整備内容は、[公式サイトで公開](#)をしている「[整備計画](#)」を御覧ください）。それを、本当に障害の有無に関わらず誰もが遊ぶことのできる状況にしていくためには何が必要か？重要視すべきは、支援する・されるといった関係を越えて、「共に事にあたる」ということであると考えています。当事者の方、地域の方、関連事業者の方など、様々な関わり合いを育むことで、地域におけるインクルーシブというものの理解をみんなで深めていくことを目指します。各種活動への参加者募集については、[play here のInstagram](#)や市報等をご確認ください。

### ○栗山公園：みんなで「ビオトープ」をつくる

栗山公園の池には、車椅子やベビーカーでも近接することができるスロープの造成が完了しました。そして、参加型のワークショップ等を経て、その池をビオトープ化していく[計画案](#)と[普及パンフレット](#)をつくりました。令和8年度は実際にその計画を実行していきます。

### ○梶野公園：みんなで「日陰」をつくる

梶野公園の、いわゆる遊具というものが無い原っぱ空間は、長らく愛され大切にされてきました。一方で、近年の気候変動も影響し、日中の日照の厳しさが課題になっています。そこで、パーゴラを立てキウイ等の植物を育てることで、日陰の休憩スペースをつくりたいと考えています（果実の収穫や活用といった発展もあろうかと思います）。

### ○三楽公園：みんなで「ひとやすみ」をつくる

三楽公園では、球技遊びの利用が活発である一方で、それ以外の過ごし方との共存が難しい局面がありました。そこで、ボールの飛び出しや安全確保のためのフェンスを造成し、グラウンドスペースの反対側にはファームングスペースを設けます。時には市内の農家さんにも知見を頂きながら、みんなのリラックスのためのハーブを育てたいと考えています。お茶やアイピローやお香など。収穫したものを加工して使ったり、市内の事業者の方に使ってもらったり。そういった広がりが期待されます。

## 【2】みんなで公園を見守るための仕組みをつくります

インクルーシブ遊具を本当にインクルーシブなものにしていくためには、人の関わりが欠かせません。そして、それを持続可能なものにしていく必要があります。散歩や買い物のついでに、公園を見守る。普段の生活や暮らしの延長線上で、ちょっとした関わりだとしても、それが集まり、積み重なることで力になります。特に、栗山公園に整備されたインクルーシブ遊具は、物珍しさも手伝ってとても人気です。例えば、その関心をインクルーシブな場のあり方へと方向づけるためにも見守りが必要です。また、前述の【1】の活動とも相互に連動させていきます。

### ○お墨付きを可視化することで見守りやすく

見守りや声がけといった働きかけをして頂きやすくするためにも、[play here](#)のロゴ入りサコッシュ等の作成と提供をし、取り組みやプロジェクトの可視化を図ります

\*参考：東京都「わんわんパトロール」

わんわんパトロールは、いつものお散歩のときに周りにちょっと気を配りながら歩くだけでOKな、一人でも、仲間と一緒に、気軽に取り組めるボランティア活動です！こどもや町を「見守る目」が増えることが、まちの安全安心につながります（[公式サイト](#)より引用）

#### ○見守るための知見を育むための展開ステップ

step1 実地検証：関係者等により現地での声かけの際の必要な知見や方法を検証しまとめます

step2 公募：とりまとめた知見をもとに担い手を公募します（募集については[play here のInstagram](#)や市報等をご確認ください）

step3 勉強会：適宜、担い手同士が集まったり知見を深める機会を創出します

#### ○担い手のイメージ

小金井市内には様々な活動や実践団体の方々がいっぱいいます。インクルーシブな公園の実現は、そういった活動の延長線上にあるものでもあるはず。個人の方々と同時に、そういった既存の実践団体の方々との連携を広げていきたいと考えています。

#### ○見守り活動の発展として

公園はありたい未来の練習場。見守りも兼ねられるような、やってみたいこと。それが生まれ、実現していくような取り組みにもしたいと考えています。

（例）

- ・公園でのインクルーシブ・ゲリラワークショップ
- ・絵本の貸し出しや読み聞かせ
- ・青空マッサージ
- ・地域の子ども向け活動団体と連携し、誰もが参加しやすい遊び場づくり
- ・使わなくなった椅子や道具などを持ち寄り、公園で自由に使えるレンタル

### **[3] 市立小学校とインクルーシブ授業開催等の連携をします**

インクルーシブ遊具があつたとしても、「心のインクルーシブ」がそこに無ければ、行けない。これは、多くの当事者の方々から寄せられたご意見でした。では、どうすべきか？様々なアプローチによる普及啓発活動の推進が考えられますが、実際に公園を利用する子どもたちに伝えていくこと、そして、子どもたちの声に耳を傾けていくこと。それを大切にしたいと考えています。そこで、[play here](#)の推進で得られた知見やネットワークを活用し、市内の小学校で出張授業を展開します。また、啓発パンフレットの配布といった情報連携も推進します。

#### ○当事者の方とともに授業プログラムをつくりたい

令和6年度より、当事者の方とともに授業プログラムを作成し出張授業を展開しています。実施場所や回数はまだ限定的ではありますが、できるだけ市内全域に広げていきたいと考えています（[play here](#)と連携し、出張授業やトークイベント等の実施にご関心がある方がいらっしゃいましたら、お気軽に環境政策課まで[お問い合わせ](#)ください）。

#### ○公園整備の工夫を伝えることで理解を育みたい

公園のハード整備には、インクルーシブであるための工夫が成されています。ただ、その工夫を意味のあるものにしていくためには、使う人の理解が欠かせません。子どもたちの生活にとって身近な公園を学びの舞台として活用

し、それらの理解を育んでいきたいと考えます。当然のことですが、障害があるとされる人にも、そうでないとされる人にも個性があります。障害と一口にいても、目に見えやすいものから、見えづらいものもあります。普段の学校生活や社会生活においても重要な、それぞれの違いを理解し合うことにもつながっていくはずです。

○啓発パンフレット等の配布をしみんなに行き渡らせたい

授業といった、質や濃度を担保する対面的な機会も大切にしていきつつ、量を担保するためにも、啓発パンフレット等の配布といった情報連携も行っていきます。

## 【4】 市内・指定管理者等との連携基盤を整備し持続可能な体制を目指します

小金井市内の220の公園は、令和6年度より株式会社日比谷アメニスによる一元的な管理運営が始まりました。また、令和6年度には地域で50年の歴史を持つ社会医学技術学院と小金井市の連携協定が結ばれ、理学療法・作業療法の知見を活かした「社会的処方」や、大学と地域が協力する「域学連携」が推進されています。この協定には、play hereとの連携も明記されています。さらに、環境政策課以外の様々な部署の方々との横断会議も行われています。そうした制度的な基盤や体制を活かし、連携を深めながら、play hereを継続的な活動に育てるための土台を整えます。

○例えば、こんな連携が生まれたら

- ・公園管理事業者との連携アクション（水やり・情報発信・窓口機能など）
- ・社会医学技術学院との連携アクション（社会的処方の推進や前述【2】の見守りの知見の精緻化など）
- ・市の関係部署との情報共有・連携を継続する（play here掲示板の活用を含む）

## 【5】 情報メディアとして公園を活用していきます

暮らしや生活のなかで多くの人が訪れる公園は、メディアとしての性質を帯びることになり、情報やメッセージを訴求するための重要な地域資産として捉えることが可能です。play hereにおいても積極的にその可能性を最大化していきたいと考えています。具体的には、サイン等の掲示物並びに新たに設置されたチラシやポスター等の掲示板の有効活用を検証し、仕組み化していきます。その際に、前述【1】や【2】の活動とも相互に連動させていきます。

○公園での情報回路

- ・案内サイン（インフォメーション）：公園の利用ルールやplay hereの具体的な活動等伝えるもの
- ・理念サイン（インスピレーション）：play hereの理念を伝えるもの
- ・掲示板（市内における情報連携）：小金井市の関連事業のチラシ等が網羅的に確認できるもの
- ・チラシ配架：チラシ等の持ち帰りができるもの

## 【6】 全国的な実践共有を進めていきます

インクルーシブ公園づくりは、全国的な実践共有がまだまだ少ない分野でもあります。それぞれの工夫が広く発信・共有されることで、より豊かなインクルーシブ公園がつけられるきっかけとなったり、政策的な後押しが生ま

れるなど、そんな流れの一端も担えたらと考えています。小金井市での実践モデルを共有するとともに、全国の知見をplay hereにも活かしていく双方向の関係をつくっていきます。

○全国連携や全国発信

- ・ [「公共R不動産」](#)などのメディアを通じた情報発信
- ・ 全国のインクルーシブ公園に取り組む自治体・団体との関係構築
- ・ トークイベントや情報連携の企画